

---

# 義経生存伝説～夢のかなたに～

かいひろし

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

義経生存伝説～夢のかなたに～

### 【Zコード】

Z9840P

### 【作者名】

かいひろし

### 【あらすじ】

悲運の名将、源義経を書こうと思ったのには訳があります。それは、自分のルーツを知ることになったのです。

天才と云われた軍略家の義経は、平泉が終焉の地と云われています。その後の人生が、岩手県には伝説のように広がっています。

義経は、生きていたのか……。



## 序章

義経の郎党に、片岡常春といつ、郎党が存在するという事実を知つたのは、義経に興味を抱いてからであろうか。主人の終始に側近く仕え、弁慶と双璧をなす片岡常春は、鎌倉時代初期の武将として、今まで語り継がれている。常春は、平安中期の武将である、房総平氏の祖といわれる平忠常の子孫であり、両総平氏一族・海上庄司常幹の子と伝えられている。

その常春は、平泉で義経と運命を共にし、高鎭で壮絶な最期を迎えた事になっている。そうした事実は、覆されることもなく現代までの定説となつていて。

私は今、岩手県に在住し、執筆活動をしている人間であるが、義経を研究して知るようになつてから、自分の家のルーツを知ることにもなつたことは、興味深い所である。

「祖先は武士である」と、私は、よく父に聞かされていた。遠野に勢力を保っていた、阿曾沼氏の旗本であつたこととは、書物にも書いてあつた。

いつも、自分の父親に自慢げに聞かされ、耳にタコが出来そうになつた話が、今になつたこの時に、何かの因縁で書くことになつた事は、不思議な気持ちでいっぱいである。

第一のこと、私は、元調理師であり小説を書こうなどとは、思いもしない自分がいた。病気になり、人生に路頭に迷つている時に、小説と出会つた記憶は新しいといえる。

さて岩手県内には、各地に義経伝説を証明するかのように、言い伝えが、広範囲にわたつて存在する。遠野物語にも、記されている事に僕は注目した。その一つの、綾織（遠野市綾織町）の続石からはじめて見る事にしてみたい。

遠野では、続石といつ伝説の場所があります。義経の郎党の武蔵坊弁慶にまつわる古い伝説です。

弁慶は怪力を見せ、一いつの岩の上に、幅が一間半、長を五間もある大石を横にして乗せようとしつこる。そして今の泣石といつ別の大岩の上に乗せた。

そうするとその泣石が云いひつた。

「おれは位の高い石であるのに、一生永代他の大石の下になるのは残念だ」といつて、一夜じゅう泣き明かした。

弁慶はそんなら他の石を台にしようと、再びその石に足を掛けて持ち運んで、今の泣石の上に置いたといつ。

それゆえに続石の笠石には、弁慶の足形の窪みがある。泣石といふ名もその時からついた。今でも涙のように零を垂らして、続石の脇に立つて居るといつ。

これが、遠野物語に残つて居る云いひつ伝説である。眞実は闇の中であるが、興味のある話である。

つづく。

## 第一話 遠野の続き石

時は平安時代の後期、奥州みちのくは急展開を向かえる時の流れが押し寄せていた。そんななか、奥州の奥地を逃避行のように進む一行が遠野保（現在の岩手県遠野市）に差し掛かる場面である。

降りしきる雨の中、大切な主人を気遣い、側にいる大きな男は、その主を庇かばうように気にかけていた。

「殿、この下でお休みくだされ。僅かでも、雨が凌ますげます」

雨の勢いが増し、濡れる主人を不憫と思っているのは、武藏坊弁慶その人である。

京都の五条で運命的な出会いを果たし、その後は一番の側近として、主人の側に片時も離れぬ男である。

彼は、大石を怪力で担ぎあげ、主人のために、雨宿りの場所を作り出していた。その怪力無双の荒法師は、元は比叡山の僧で、武術を好み、勉学にも精通し、大いに役立つ緯丈夫である。

その様子を普段から見慣れているが、郎党の力む顔を見るなり、その男は労わりの言葉をかけた。

「あまり、無理をするでない！」

その怪力の配下の弁慶を心配しているのは、九郎判官こと源義経である。京都の鞍馬で幼き頃を過ごし、壇ノ浦で平家を滅ぼした英雄は、兄の頼朝の確執により奥州の奥地に逃れてきていた。

そして、平泉の高館を襲撃された後、配下とひそかに抜け出して、命を長らえている。彼にとって、これから続く逃避行が運命を変えてゆくことになる。

「弁慶の怪力は、馬鹿力よ。いざとなれば、一万の兵に匹敵しますな！」

そう云つて、配下の者がいる。その男こそ弁慶と双璧をなす、義経の側近の片岡常春であった。

「なあに、常春様もいざとなれば、百人力の名将でありますぞ！」

弁慶と義経が、その男を見た。

「喜二太も、口が上手くなつたわい！」

弁慶が、喜二太を笑いながら見つめている。喜二太は京都にいた頃からの下僕であり、特に義経の馬回りを担当していた。

「しかし、このような場所で雨宿りになると、自然には勝てぬ。

そう思わんか？ 六郎？」

そう呟いた男が鈴木三郎で、話しかけられた男は弟の亀井六郎である。平安時代の末に藤白鈴木氏から出た鈴木三郎重家・亀井六郎重清の兄弟は、源義経に郎党として仕えている。

「仕方ないだろう。雨は天候だしな！」

六郎が、他の主従を見ている。

「まったく、仕方のない事ですわ！」

「わははははっ」

主従が、一斉に笑いだす。その他、この一行には増尾十郎、鷺尾三郎、駿河次郎、備前平四郎が従っている。

増尾十郎は、正妻の北の方の幼いころからの盛り役であり、一番の年長者である。

鷺尾三郎は、元は播磨山中にて猟師をしていたという郎党。

駿河次郎は、元は猟師だったといふ。初めは頼朝の家臣だったが、後に義経の郎党になる。

備前平四郎は、奥州に義経が落ちてきたときの従者である。

一行は平泉の難を逃れて、遠野保の続石（現在の遠野市綾織町）に差し掛かっていた。

この場所は、遠野保に入る玄関口なる場所で、三陸に抜けるには大切な場所柄であるといえた。

「ここは、遠野保といふところであるのか？」

義経は、小高い丘の上にある続石より、雨の降りしきるなか、遠野へいく街道筋を見つめている。

川並みに続いている土手が、どこまでも長く続いているように作られているようにも思えた。

今日、春の季節に立ち並ぶ桜並木が、見事で行く人を和ませる場所である

「これよりは、遠野保という土地のようです」

主従の片岡常春が、雨の中、遠野のはるか遠くにそびえる六角牛の山並みを望んでいるが、霧みちのくがかかつていて見ることはできない。一行は、雨の降りしきる奥州の遠野の入り口で、進路を如何にとるかを決めかねていた。

つづく。

## 第一話 泰衡の襲撃

風雲急を告げるみちのくの小京都、豪華絢爛なる平泉では一大事が起きようとしていた。

時は、文治五年（一一八九年）のこと、四月二十九日夜半から三十日の朝にかけて、奥州藤原氏の四代目の泰衡は、家来の長崎太郎を大将にして、五百騎の軍勢で義経の居館高館に攻め込んできたのである。

忠衡の忠告どおり、泰衡は頼朝の抑圧に耐えきれず、義経の屋敷を包囲し襲つてきた。

「おのれ、裏切りあつて。泰衡は卑怯者よ！」

増尾十郎兼房と雑兵の喜三太は屋敷の上に駆けあがり、引き戸の格子を小楯にして弓矢を次々と射ち放つている様子である。

「こうなれば、半ばやけくそよ！」

敵は、多勢であり引く弓にも力が入ることは、これから始まる死闘を克明に物語つていた。

そして、屋敷の大手門には、弁慶、片岡常春、鈴木三郎と龜井六郎の兄弟、鷺尾三郎、駿河次郎、備前平四郎の七人が立ち塞がり、押し寄せる藤原勢に立ち向かおうとしている。

「これより先は通さぬぞ。これよりは九郎様のご寝所、立ちに入る者は容赦せぬ」

攻め手を睨みつけ、必死の形相で戦おうとしていた。その尋常ならぬ、雰囲気が攻め手を圧倒する。

しかし、義経の陣営でも異常事態が起きていた。常陸坊など十一人は、朝から山寺参りに出向いて、まだ帰っていなかつたのである。「常陸坊および、十一名は山に行き戻らんわ！」

片岡常春は、常陸坊の不在に気が付いている。

「逃げてしまつたのか？」

主従は、顔を見合させていた。

常陸坊海尊は、源義経の家来となつた後、武藏坊弁慶らとともに義経一行と都落ちに同行している。

そして、義経の最後の場所である奥州平泉の衣川の合戦では、源義経の家来数名と共に山寺を拝みに出ていた為生き延びたと言われている。

常陸坊以下、数名は不在である。屋敷に残された義経主従は、必死の防戦をおこなう覚悟を決めている。

押し寄せる敵に、弁慶は鎧をまとい、おおなきなた大長刀の真ん中を握つて立ち構える。迎え討つ敵は弁慶を見るや、恐ろしさのあまり身構えるだけであった。

「離し立ててくれ、攻めてきた奴等にいいものをみせてやる!」

「わしはこう見えても若い頃、比叡山で詩歌管絃を許されていたのだ!」

「一手舞つて奴等に見せてやるわい!」と言い、鈴木三郎、亀井六郎に離させて踊り出したから異様な雰囲気が伝わってくる。

うれしや瀧の水

鳴るは瀧の水

日は照るとも絶えずとふたり

東の奴原が

鎧兜を首もろともに

衣川に切流しつるかな

弁慶は、押し寄せる敵の前で見事に舞い切つた。その様子は、敵を圧倒するに十分であった。

「判官殿の御屋敷には剛の者がおいでになる。ぬかるでないぞ!」

攻めてきた陣営の者が驚愕の声をいつせいにあげはじめる。

「寄せ手が五百騎で攻めているのに、屋敷には、たつたの十騎ばかりであるのに!」

攻撃側は、驚きと妙なる緊張感を抱きはじめている。

屋敷にいる義経主従は、少数でも精銳揃いである。攻めてきた側には、恐怖心を与える演出であることは、弁慶が一番知っていた。

「敵も怯んでいるではないか！」

弁慶は、敵を恐れぬ荒法師となり、今まさに、義経軍団の鬼神となろうとしていたのである。

そして、なおも舞い続ける弁慶からは、豪壮なる凄味が伝わってくる。

少數と思い、攻めてきた泰衡の手勢は、この期に及んで拍子抜けしている状態である。

「それでも、ああやつて余裕をこいて踊っている！」

見る側は、呆れ顔で弁慶を見ている状態であり、最後の意地を見せつけようとする男の舞いに見とれる始末であることは、攻め手の戦闘意思を半ば、削ぐ効果があつたのである。

それだけ、武蔵坊弁慶の舞いは、初夏の平泉にひとつ花を咲かせていた。

つづく。

## 第二話 覚悟の高館

桜が乱れる春の平泉は、戦場と化している。ここに、当代隨一の英雄である義経は、危急存亡のときを迎えるか遠いみちのくで、最後の場所を迎えるとしていたのである。判官義経の居館である高館では、怒涛の如く荒武者が入り乱れて、その場所は騒然としていた。そして、攻めよせる泰衡の手勢を、睨みつける武藏坊弁慶は、舞を終えると敵が怯むような大きな声で叫んだ。

「東の方の奴等に、お手並みの程を見させてくれようぞ。貴様らを、死出の旅路に道連れにしてやるわ！」

そう言つて長刀をふるい、群がる敵に獅子奮迅の最後の見せ場を作ろうとしていた。その横では、鈴木三郎と亀井六郎の兄弟は太刀を冑の真っ向に構え、弁慶共々の三人が、轡をならべて敵方に攻め込んで行く。

弁慶らの反撃は凄まじく、一瞬、さつと散つて寄せ手が退いた。真剣なる弁慶は、血相を変え大長刀を振り回している。その他の郎党も、死に物狂いで、敵に反撃している有様である。

「ええい、義経様には、一太刀も触れさせぬわ！」

郎党たちは、必死で抵抗を繰り返す。鈴木三郎は、腕を切られて反撃が辛くなるところを、弟の亀井六郎が必死で防戦し、守る姿も見受けられる。

弁慶は矢傷を受けても、防戦を試みている状態で、真剣そのものである。そして、負傷する者も、命の限り闘つ有様であつたといえよづ。

義経も、途中まで反撃を試みていたが、「これまで」と覚悟を決めるべく、姿をその場から消し去り、運命の場所へ向かつてゆく。

それから、義経は持仏堂に入ると、静かに般若心経を読んでいたのである。

「觀自在菩薩 行深般若波羅蜜多時 照見五蘊皆空 度一切苦厄

舍利子 色不異空 空不異色 色即是空……」

まさに、危険の迫る中、自害の覚悟を決めている瞬間であった。

（もはや、これまで…）

（この義経も、最後を迎える時が迫つてゐる）  
(無念なり!)

心の中で、義経はその無常を呟いた。

「十郎、そちに介錯を任せん。義経の首、泰衡には渡すな！」

扉を閉めると、従えてきた増尾十郎に、介錯を一存しよいつとじつ

いた。

「殿、御勞おいたわしや。」この十郎が介錯をする」とになるとほー…」

十郎は涙を流し、義経の側に寄つてくれる。

「十郎、うぬには、苦労をかけた！」

最後の会話が、涙を誘つようになに物語つてゐる。十郎は、義経を強く抱きしめる。

「もうよい、十郎。覚悟は決まつておる!」

悲しみに満ちた瞳が、生涯の英雄なる風格を醸し出していた。

「さらばだ、十郎！」

義経は小刀を抜き、北の方と四歳になる娘を殺めようとした。僅かながらの抵抗は試みたが、あまりにも屈辱的なる最後は、義経らしいとはいえない。

あえて、持仏堂での自害を決めたのは、家族を敵の手にはかけたくないと思つ義経の心なる想いが伝わつてくる。

「死んで、あの世で再び、家族として会おうぞー。」

「父上、もうお終いなのですか？」

涙ぐむ四歳の美雪の涙は、義経の心の情に悲しき運命を投げかけている。

注釈 美雪は想像上の義経の娘の名。実際には名前は不明である。

「一想いに殺して下せ」ましー。」

妻の郷が、義経にしがみつくように哀願した。

「このよつな、不憫な想いをさせる私を許してくれ！」

源平合戦の英雄、義経は覚悟を決め、己の短い生涯を終えようと

している。意を決し、突き刺そうとしたその瞬間である。

事態を急変させる出来事が、英雄の義経の運命を変えようとしている。天は、まさに起死回生の出来事を演出しようとしていた。

つづく。

## 第四話 偽装襲撃

弥生たなびく花美月のなか、昨日までは味方であった筈の藤原泰衡の手勢が押し寄せてきている。そんななか、騒然たる義経の屋敷では、敵味方が入り乱れ混乱の状態にあった。そんな場所に天の悪戯であろうか、泰衡の使者がやつてくることになる。

「お待ちくだされ、義経殿。早まつてはなりませぬ！」

一人の見覚えのある男が、裏口より慌てるように屋敷に飛び込んで来たのであつた。一瞬の出来事に、郎党たちは皆、驚愕の表情を浮かべている様子である。

その修羅場と化している、その場所に飛び込んできたのは、藤原泰衡の弟の忠衡であつた。

衆寡敵せずと思われた、義経側の陣営の救い主であるその人は、もうこの世の人ではない人物である筈であつた

その様子を見ている一同は騒然となる、攻め手、と守る側が呆気に取られ、口が開いたまま声が出ぬ有様が、何故か滑稽に思える。

「これは、偽装襲撃でござります。双方とも、刀を收めてくださいませ！」

攻め手の長崎太郎は、驚いている様子である。それもその筈である、忠衡は、先日の折り、泰衡に襲撃され命を落とした筈であつた。

「落ち着いてくだされ、泰衡さまの策でございます」

忠衡を死んだと思っていた義経主従は、その時に泰衡の思慮の深さなる真相を、この場所で知ることになつたのである。

「偽装襲撃でござりますか？」

「あなた様は、この前の襲撃で討ちとられたはずとご理解しておりましたが！」

攻め手の大将、長崎太郎は眼を丸くしている。

「そうだ、泰衡様の鎌倉方を誤魔化す大芝居よ！」

「わしは、こうして生きているではないか！」

事の真相を話したと、攻め手側と守りに徹していった義経主従が、やつと偽装襲撃の事実を知つて納得はじめた。

「しかし、泰衡様もお人が悪い！」

「何も、聞いておらぬから、危なく義経様を自害に追い込むとこであつたぞ！」

大将として將兵を率いる長崎太郎は、天を見上げ一息ついた。しかし、のんびりはしていられない。

最後の仕上げの手筈を整えねばならぬことは云うまでもない。「これより、屋敷に火をかけます。偽装襲撃の最終仕上げです」忠衡のいう通り、双方とも訳のわからぬまま屋敷に火が放たれる。

「義経様、これより忠衡が、案内仕ります！」

「こゝの地には、間者が来ているかも知れません」

「一刻も早く、この地を離れましょう！」

事を知つた、攻め手は偽装襲撃を完了させるため高館を襲つてゐるよう見せかけていた。

「こゝの義経も、生き長らえるとは、奇跡のような想いである」

義経は、やつと小刀を鞘に納め、屋敷を離れる覚悟を決めた。一行は、燃え盛る火の中、高館を逃れてゆく。

「忠衡様が、生きておられるとは、弁慶もわからなんだ！」

驚愕の事実を知つて、弁慶は気持を落ち着けている。

「わしは、何人かは殺めたぞ！」

弁慶は、襲撃が迫真に迫る感じであつたので、大長刀で払つてゐる始末である。

「わしもじゃ！」

郎党の片岡常春が、返り血を浴びたくらい真剣であった。

「誠に、これまでと思いました。義経様に刀を突き付けられた時は覺悟を決めておりました」

北の方が、涙ながらに語つてゐる。四歳の娘も、さぞかし恐ろしい想いであつたようだ。

「すまぬ、誠に申し訳ない！」

「一足でも遅ければ、取り返しのつかぬことであった」  
忠衡は、義経を見て頭を下げている。遠く見える、平泉の高館は  
爛々と燃えている。

つづく。

注釈　衆寡敵せずとは、少人数で勝ち目がないこと。

## 第五話 身代わりの男

春を惜しむ、名残の桜が平泉を薄紅色に染めている。そして、燃え盛る義経の屋敷の高館で、最後の仕上げが行われようとしていた。義経主従が平泉を抜け出して後、九郎判官と云われた義経の影武者の杉目太郎行信が、燃え盛る炎の中、自害して果てる瞬間を迎えている場面である。

思えば、義経の配下となり影武者の役目を担つてきした行信は、主との出会いを思い出すように平泉の夜空を見つめている。

杉目太郎行信は、佐藤庄司基治の三男である。実際の行信は義経の母方のいとこと云われ、年や背格好が義経とよく似ていたため、以前から義経の影武者となっていたと言われている。

物語は、行信に泰衡が身代わりの要請に向かう場面。奥州藤原氏の四代目の泰衡が、義経の偽装襲撃を演出することを心に決めた頃にさかのぼる。

泰衡は義経を助けるために、杉目太郎の屋敷を訪れ、説得を口論なんだ。

その日は霧が一面に立ち込め、辺りは朧月おぼろつきの微かな光が闇を照らし、静けさがいつそう感じられている。

泰衡は行信の屋敷に来るまで、慎重な行動をとっていた。その井出達はある雑兵の格好にも見える。

泰衡は、屋敷内に入ると行信の待つ部屋を訪れる。

「影武者として、今まで従つてゐる、義経殿の屋敷を偽装襲撃することが決まった。その仕上げに行信殿に申し訳ないことがあるが、義経殿の身代わりとなつて、自害して頂きたいと存ずる」

懇願する泰衡の目には、涙がにじんでいる。悲しい決断ではあるが、主君の義経のために死ねると、影武者の行信には武士の誇りに思えた瞬間である。

「お解かり申した！」

「格なる上は、仕上げに屋敷に放火して頂きたい。この首を、分からぬ様にしてもらえれば、時間稼ぎは必定といえましょう」

その堂々とした様子を見ていると、泰衡は泣かずにはいられなかつた。

「主君を、助けるためには仕方がない」

「泣かないで下され、泰衡殿！」

覚悟が決まる、行信は泰衡の手を握る。義経には、内緒で事を運ぶ密議が行われている。

それから襲撃の時を迎へ、杉田太郎は、義経には内緒で高館にやつてくる。そして、火が放たれる寸前に、義経の一行が、離れるのを確認すると、屋敷内に密かに侵入する。

泰衡の軍勢は、偽装襲撃を繰り返していた。泰衡に選ばれた、偽の義経主従も奮戦して、自害して果てる演出も行われている。

杉田行信は、燃え盛る炎の中、割腹自殺の場面を迎えている。

「もはや、これまで。義経様の身代わりで旅立つ榮誉！」

「この行信、見事に散つて果てて見せますぞ！」

そう言い残すと、行信は平泉の露と消えた。燃え盛る炎が、悲しく赤く輝いていた。

あれから数日が経ち、義経の一行は、遠野の入り口の続石に、休息の場所を構えていたのである。この土地までくるのも、苦難の連続であつたことは、一行が一番知る事であつた。

遠野にこのまま入るには、人通りが多い街道筋である事が危険に感じられる事が考えられた。

いかに、偽りの首で頼朝を欺いた泰衡の策とはいえ安心はできない状態であることが考えられたのである。

つづく。

## 第六話 首を届けに鎌倉へ

奥州は、初夏を迎える頃である。あやめの花が柳の御所を彩り、毛越寺の水辺には蛙の声が響いている頃である。

義経の去つた平泉を、偽の首を届けるべく、泰衡の指示どおりに新田高衡が従者数名を従えて、鎌倉に発つたのは五月の初旬頃であった。

高衡は、秀衡の四男で泰衡の弟である。その重要な役目を兄の泰衡に支持され、意気揚々と出かけていく。

しかし、鎌倉に偽の首を届ける役目は危険が多く、果たして頼朝達を誤魔化せるかは、とても重要な役目であるといえたのである。

「高衡よ！ 無事にこの役目が成功すれば、そちの功績は大きいと思うぞ」

「思うに、鎌倉までは一本筋では行く訳がない。必ず、待たされるに相違ないと存ずるのだが？」

「誠に、その通りであると！」

「頼朝はこの一行を、鎌倉には容易に入れてくれるとは思いませぬ」  
高衡が兄の泰衡を見上げた。

泰衡の読みは深い、思慮深く警戒心のある行動が、「」との是非を判断するには必定といえたのである。

「覚悟のうえ、この高衡。一命を賭けて、偽の首を届けに参ります。命があれば、ご再会をこの平泉で、誓いたいと存じます」

こうして、高衡は平泉を発つていった。

一行は、奥州街道を進み、腰越の浦で、鎌倉の指示で数日間滞在することになるのである。

まさにここには、義経が四年前に、涙ながらに「腰越状」を認め、頼朝の許しを請うた場所である。そして、その甲斐もなく、弊履のごとく頼朝に冷たく追い返された場所でもあった。

高衡は、義経によく、その話を聞いていた。

彼は、感慨にふけっている。

(まさか、義経様と同様、この地で待たされたとは…)

従者の者も、待たされることに苛立ちを隠せない様子である」とは、その緊張している期間の長さが物語る。

「殿、鎌倉方は、こうして我らを愚弄するつもりで御座いますか？」

一人の従者が、不満を露わになると、落ち着いて高衡が答える。

「これは、駆け引きだ。我慢できぬでは、我らが負けを認めることになる」

「されど、あまりにもひどい仕打ち。鎌倉殿のこの意識はいかほどののか！」

「泰衡様の御意向もある。軽率な行動は、偽の首を持つてきていることを暴露するようなものである」

数名の従者が、苛立ちを隠せなくなっていた。その苛立ちを必死で抑えようとする高衡の苦労は大きい。

「しかし、この妙な緊張感は耐えるには地獄である」  
偽の首を届ける、役目は至難の役目である。偽りと、解かることがあつてはならぬ緊張感が、高衡の心を震わせていた。

「しかし、鎌倉方の法要の予定とぶつかるとは、何たる不覚。時間稼ぎには、格好の口実であることは間違いない！」

「上手く、口実を作らせてしまった様じや！」

一部の従者が、不満げに話し込んでいる。

この使節の長である高衡は、策略の皮肉さに、不満感が募る部下の心情も理解できている。

鎌倉方にとって実は、頼朝の亡き母の追悼供養を六月九日におこなう日取りが組まれていたのである。

鎌倉の鶴岡八幡宮に、塔を建立した上で供養の式を実施することが頼朝の指示で予定されている。

その事実を、腰越で知られた高衡は、仕方なく待つことを余儀なくされていた。

「こ」の後におよんで、鎌倉殿の母様の追悼供養とは。その場に繰り出した我らも間抜けではないか！」

さすがの高衡も、腰越で地団駄を踏むあり様であった。

首は、初夏の熱さのために、腐敗が進んでいると考えられた。それから、ようやく鎌倉方の首実検の知らせが届いたのは、六月の月中旬近くであった。

つづく。

## 第七話 首実検

一行は、風待月の頃、判官九郎義経のように腰越で数日間も待たされている。そして、その苦労が報われ、首実検の許しを得た瞬間であった。

「これから、ようやく首実検が始まろうとしている！」

高衡は、平泉を出た頃を思い出していた。おもえば、偽の義経の首を丹念に運んできた苦労が浮かんでくる。

高衡の一行は、文治五年の六月十三日に、義経の首なるものと称し、美酒に浸して黒漆塗りの櫃に収め、四十三日間かけて鎌倉に送つている。

もちろん中身は、義経のものではなく偽の首、杉田太郎行信その人である。

「ようやく、首実検が許された。相当、待たされたものだ！」

高衡が、安堵感を従者に漏らしている。

「そうで御座います。鎌倉殿のあしらいは、我らを馬鹿にしておられます」

従者の一人が、不満げに怒りのこもった言葉を露わにした習慣であつた。

鎌倉方の首実検の一行が、腰越の地を訪れたのは、この地に到着してから飽きるくらいの日々を過ごした後である。

頼朝の命で、選出された梶原景時と和田義盛が先頭に立ち、数名の従者がそれに従っている。一瞬、異様な雰囲気を感じさせながら、首実検はこの両名の手で開始されることになる。

「判官殿の首実検に関わるとは、皮肉なものよ！」

両名は口を揃えて、その気持ちを露わにする。彼らは、正反対に義経に対する想いがあつたのである。

義経の人格や軍略に、最も心服した和田義盛に対し、最も毛嫌い

し、盛んに中傷している梶原景時との差である。

両者は皮肉にも、義経の偽の首実検に立ち会うことになる。

「一同、整列致せ！」

大将級の首実検であるとこゝうことで、鎧を着用し、直垂ひたたれをつけている井出達で首実検をおこなうことになる。

郎党たちも、揃い踏みに皆、銘々がその甲冑をつけている。

「これより、義経の首を檢める！」

義経の首は、いくら酒に浸けられたとはいえ、腐敗はかなり進み、さらに焼き首であるがゆえに、判別は難しい状態である。

実際に首実検した梶原景時は、初めから、義経の首に不信感を抱いていた。

「これは予州（義経）の首ではない！ こんな、焼け焦げた首で、判断が出来ようか！」

義経の首に対し、不審を明らかにした。それに対し、和田義盛が景時を制した。

「この首は焼け首であり、生前と異なつて見えるのは当然である」「しかもこの首には眼中に光があり、むざむざと鎌倉に入れたら、祟りが起こるだらうと思われる！」

焼け首を、義経のものと決める瞬間の言葉である。見る者は、皆涙を流し、義経の生前を思い出している様子が窺がえる。

「独断専行が多いとはいへ、こうなられてはどうにもなるまい」

景時は、ため息とともに呟いた。

「義経の首と断定する。これにて、首実検を終了する！」

和田義盛の、裁定で偽の首は、義経のものと決め付けられた。

そして高衡は、ねぎらいの言葉を期待してはいたが、鎌倉方は黙つて立ち去つて行くことになる。こうして、義経の首実検は終了した。

腰越の浜は寂しく、夕涼みの中にたたずんでいるのが印象的であった。

そして頼朝は、朝から用事と称して出かけていて、首を見ていなかつた。また、母の法要のためという理由で首が鎌倉に入るのを禁じてしまった。結局、その首は頼朝が確かめることもなく、すぐに海に捨てられてしまった。

泰衡の思惑は、どうにか一時的に凌いだ程度である。今後の鎌倉の動きが不気味さを物語る。

つづく。

## 第八話 佐藤基治の館

鎌倉で、偽の義経の首実検が終わった頃、奥州の奥地を行く義経の一行は、平泉を脱して束稻山（束稻山は、現在の岩手県平泉町、奥州市、一関市の境界にまたがる山）の麓を進んでいる状態であった。

彼らは、背中には笈おいを背負い、山伏の姿に身をやつしている。それは、人目をはばかるための偽装としかいえない。

（笈というものは、背に負う経文などを入れる箱。僧、六部、山伏などが諸国回遊のために用いたもので、文箱ともいわれた。）

されど、義経らにとつて、京都を出る時からのたび重なる逃避行の繰り返しには慣れているとはいえ、主従は行き場のない現実に戸惑いを隠せない想いもあつた。

まず一行が、最初に身を寄せたのが長部（現在の平泉）にある佐藤庄司基治の屋敷よしひさであった。

基治の屋敷の前までは、杉林が生い茂つていて、鬱蒼うつそうとした林の中に、外からの侵入を拒むように屋敷が居を構えている。

義経は、その杉林を見ていると、平泉に初めてやつて来た頃を思い出さずにはいられなかつた。

「懐かしい想いがしますな！」

その様子を気遣う、伊勢三郎義盛がすかさず声をかけていた。  
「複雑な心境とは、このようなことを言うのか」

その一言が、重い意味をなしていることは、弁慶らも承知である。一行は、ようやく基治の屋敷に到着する。周辺を見渡した後、義経は屋敷の主にそつと声をかけた。

「お邪魔申す！」

義経が軽く挨拶をしていると、中から屋敷の主、基治が出てきた。  
「これは、義経様。ご無事でありますか！」

義経の無事を確認した基治は、安堵の表情を浮かべている。

「お久しうつござります」

義経は、挨拶を済ませると基治の手を握り、再会を喜んでいる。

佐藤基治は、義経に命を賭けた主従の継信と忠信二人の父である。「お入りください」

基治に即され、主従は邸内に入つていぐ。背負つている笈を、背中から取り外し、一同は囲炉裏の周りに座り込む。

「基治殿、かたじけない」

そう言つと、義経は眼を閉じる。皿蓋のなかには、継信や忠信の姿が浮かんでくるのであった。

「忠衛様と、平泉を落ち伸びたと聞いておりました」

平泉の襲撃を、偽装と知つてゐる基治は、義経がこの場所を訪ねてくることを承知の上であった。

基治は、続けて二人の伴の「最後を義経主従に訊ねる。義経は、目を開いて語りだした。

「屋島の鬪いのおり、継信は私の代わりに矢を受けました」「私は、この世に思い置くことはないかと尋ねたところ」「継信は、こう云いました

「別に何事も思い置くべきことはない」

「されど、主君が世の中で榮達するのを見ずして死ぬことが心に懸かることです」

その言葉には、志半ばで散る悲しさが物語る。義経は続けて、その状態を思い出すように話し出す。

継信はひん死の状態で、声を絞り出していた。

「武士は、敵の矢に当たつて死ぬことは元より期するところです」

「なかでも、源平の合戦に奥州の佐藤三郎兵衛継信という者が、讃岐の国、屋島の磯で主に代わつて討たれたと、末代までの物語に語られる」とこそ、今生の面目であり冥途の思い出です

「そう言つと、静かに息を引き取りました」

継信の最後は、武人として立派であった。義経を守るべく捧げた命の重さが伝わってくる。一同は、涙して故人を偲んでいる。義経は続けていう。

「私は鎧の袖を顔に押し当てさめざめと泣き、近くに僧がないか探させ、継信を供養させました」

「継信の弟の忠信をはじめ、これを見た侍たちは、皆涙を流していました」

義経は、感情を抑えることが出来ず、涙声で事のすべてを話した。言い終わると義経は悲しくなれずにはいられなかつた。

その表情を見つめる、一行の想いが基治の屋敷にて思い出の涙に化した瞬間である。

つづく。

## 第九話 誉れ高き、兄弟の魂

春の桜が空を舞つてゐる。故人を偲ぶ想いは、義経主従の心に悲しみを植え付けていた。思えば、平泉を発ち、頼朝のいる黄瀬川を目指した時よりのかけがえのない郎党を失つた事実は、彼岸の季節になると懐かしく感じることもあつた。

「忠信のことは、弁慶が説明してくれるか」

そう言い残すと、義経は、涙を浮かべて基治の屋敷から出て行き、庭に咲いてある躊躇つつじの花の側で、夜空を見つめて溜め息をついた。その義経の代わりに、弁慶が忠信の最後を語ることになった。

「文治元年十一月三日、忠信は、都を落ちるご主君に同行いたします。そして六日に大物浦を船出して九州へ向かう途中、激しい嵐に見舞われまして、船は難破して一行は離散してしまいます」

「そのとき忠信を含め、義経主従は船の難破により、散り散りになつてしまします」

「義経に従つものは、弁慶、堀弥太郎、伊豆有綱、静御前とわずか四名のみで、他の者は行方が分からぬ状況であります」

「その後に忠信と合流して、吉野山にて敵に囮まれた時の絶体絶命の時に、忠信は、殿しんがりと努め、見事、主君の義経を遠方へ逃がすことに成功いたします」

「その後、忠信は危機を脱し、義経と別れることを心に決め、京都に潜伏することになります」

しかし、潜伏先は密告から知れることになる。いわば、もとの恋人の裏切りであつた。

「文治二年、九月二十一日、人妻である、かつての恋人に手紙を送つた事から、鎌倉の御家人・糟屋有季に居所を密告され、潜伏していた中御門東洞院を襲撃されました」

「忠信は奮戦するも、多勢に無勢で郎党一人と共に自害して果てたそうです」

奥州の地の平泉を出て、義経に従つてから六年目の事である。離散した主従は、話す言葉もなく下を俯いていた。流れる涙が、その悲しさを物語つていた。

話を終える頃に、義経は屋敷内に戻つてきていた。気持ちが落ち着いたのか、基治の手を取り、臣下であつた二人への思いもあり、労いの言葉を述べることになる。

「両者とも、この義経のために命を尽くしたも同然です」「この義経があるのも、継信と忠信兄弟の忠臣あるが故、忘れることがなどできましょうか」

悲しみを堪える義経は、涙を袖で拭つた。生きて基治に告げねばならぬ事態は、主従にとっても運命的な因縁である。

一次、その場が黙り込むが、基治は眼を閉じ、瞑想した後に静かに口を開いた。

「共に、立派な」最後であつたと想います。父は名譽ある息子達を忘れはしない！」

「ご主君のために、散るは武士の本望！」

「決して、恥ずかしい事ではありますぬ」

基治は、涙を流しながら義経の手を握り返すと、亡き兄弟の言霊のようすに言つ。

「今後は私も、お供させていただきます。この基治、義経様の『家来衆となり、あなた様をお守り申し上げます』

「しかしながら、この地は危険でござります、明日にもここを出発せねばならぬでしょ」「う

先に述べたように、義経の偽の首は、三男の行信であつた。義経の影武者として従い、今回の高館で義経の代わりに自害し、火を放つよう進言したのは行信であつた。最後は、見事といえる割腹で、義経のために命を落としたのである。

二人の伴が命を賭け、またしても行信までも亡くした父は、武士の本戒を遂げた息子達を誇りに思つていた。

「かたじけない、この義経はかなりず生きて、亡き」兄弟のためにも本戒を遂げたいと思います」

義経主従は、生き伸びて此処に再起を誓つた。佐藤兄弟が、命をかけた義経は平泉を遠く望んでいる。

つづく。

## 第十話 消えた海尊

平泉を逃れた頃は、染井吉野そめいよしのが咲き乱れ、季節を感じさせる長閑な景観が広がっていた。そらから、逃避行のよつて一行は、想いの馳せる黄金色の都を後にする。

じつして、佐藤基治の屋敷を訪れ、義経は生きている意味をじつくり考えれば、これから行動をどうするかが鍵と考えている。

「今後は、如何に行動をとるべきか？」

ぱつりと、義経が意味深に呟いている。

「まずは、この地を離れ、再起を目指しては如何かと…」「常春がひとこと、義経を見て云つた。

「そうは云うが、この少人数ではどうすることもできない」

話を交わす中、基治は、義経の主従を中心なる人物がないことに注目した。四天王と云われる常陸坊海尊が、この一行にいないことに気が付いたのだ。

「海尊様が居られぬようだが、どうなされたのか？」

基治は、海尊のいない訳を一行に訊いている。その海尊は、義経の側近で裏切ることないと考えられていた。

「常陸坊など十一名は、朝から山寺参りに出向いて、まだ帰っていないのです。そのまま、消息は解からぬままです。こちらに来たのでしょうか？」

思えば、偽装襲撃の朝に山寺に行つて以来、行方が知れていらない状況である。義経たち一行は、常陸坊海尊率いる一行が、基治の屋敷を尋ねて、義経らの消息を訪ねてきたと思っていたのだ。

「ここには、海尊様はおろか、誰も訪ねて来てはおりませぬぞ！」（海尊と行動を共にしている一行の面々は、片岡為春、黒井景次、熊井忠元、佐藤義信、佐藤経忠、頼然禅師、江田弘基、赤井景俊、そして匿われて命を長らえている義経の息の安居丸。最後はこの義経主従が平泉に来ることになつたときよりの追従人の源ノ弘綱であ

つた。）

主従は、その言葉に驚愕を覚え、誰もが顔を見合わせている有様である。必ず、この場所を訪れると思われた一行は、誰一人とて姿を見せていない状況が謎めいている。

「左様ですか。海尊らは偽装襲撃とは知らずに、潜伏している可能性がある！」

弁慶は、事の重大さに気付き始めている。潜伏している海尊は、この事実を知らず、何処かに隠れていると予想された。

「誠でございますか！ 海尊殿はどこへ行かれたのか？」

喜三太と、駿河次郎が顔を見合わせている。

「偽装襲撃は、攻撃側の長崎殿も、わかつてはおられなかつたようじゃ！」

「どこかに、隠れている可能性がある。海尊のことだ、平泉の近くに潜伏する状況は少ないであろう」

義経は、冷静に考えている。おそらく、海尊は襲撃が事実だと思い、残りの一行を連れて落ち伸びたものと考えられた。

「それが事実なれば、一刻も早く、海尊らに知らせる必要があるな！」

常春が、一言で意見を言うが。

「それは、逆に義経様を危険にさらす可能性も考えられる」

「ここは、我らのみで義経様をお逃がしすることが先決であろう」

弁慶が状況を把握して、事の大切さを皆に説明していた。いかに海尊に知らせる状況ではない事に、一行は焦りを感じている。

この状況下では、間者が入り込んでいる可能性がある今、危ない行動は避けるべきであった。

「この広い、陸奥の奥地で探すのは至難の技ですぞ  
陸奥を知る基治が、一行に現実を告げる。

「されば、見捨てるのですか！」

亀井六郎が、海尊を心配するあまりむきになつてている。

「落ち着け、六郎！ 行く先々で、証拠を残す訳にはいかぬ

「偶然の再会しか、ないのではないか？」

弁慶が、口を一文字に結んで六郎を見ている。

「海尊側も、十一人の大所帯である。目立つ行動は、控える筈だ！  
行動するには、多すぎる人数であるため、少數で別れて行動する  
可能性があると考えられた。

「今宵は、休みましょう」

夜も更け、月が覗いている。

そして心地よい風が舞い、鳴く虫の声が聞こえてくる。静かな夜は、  
心地よく義経らに深い眠りを誘っている。

義経は、眠りに着くと幼き頃の夢を思い出すように見ていたのであ  
る。

つづく。

## 第十一話 幼き頃の夢

月あかりは闇を照らし、一行は深い眠りについていた。

その義経は時折、幼き頃の母の記憶が夢になつて、思い出すかのよつに見るときがあつた。今宵もその夢が始まろうとしていた。

ちらちらと雪が舞うなか、一人の女性が幼児を連れて京都の街を進んでいた。

母の常盤の懷に抱かれ、幼児の一歳は小さな手を悴ませ寒さに震えている。耐える母に、一緒に連れられた、ふたりの兄は転びながらも泣きながら歩いている始末である。六歳は手を引かれ、八歳は道先を先導するように進んでいた。

常盤は留守居のおり、平家に捕まつた母の嘆願の為、清盛の屋敷に向かう途中である。ときに、常盤の母は娘と孫のことを想い、身代わりとなるつもりで捕まつたのである。

その母は気丈なる人物で、平家の従者の厳しい拷問には屈しなかつた。常盤は、心中に母のことと思い、自らが名乗り出ることを選んだのである。

抱かれた幼児の耳には、母の常盤の、鳴き声が木靈のよつに聞こえてくるのが物悲しい。

常盤は、雑仕女の頃に従えた九条院に赴き、事の訳を進言し六波羅まで届けてもらうことになった。

憎き平家の棟梁の清盛に、女の身一つで向かうしか助かる道はないと考えたのである。そして、常盤の白首騒動に六波羅は大騒ぎになり、一日見よとする群衆で、屋敷の表は人の波が押し寄せている。

常盤は、覚悟を決め、白洲の上にひざまずき、これから清盛との対面をおこなわれようとしている。

清盛は屋敷内から、現れて常盤に引見することになる。そして母

子四人は、清盛の前に引き出され、詰問されている。

常盤は涙ながらに、清盛に懇願した。

「何の罪もない、母をお許しください。子供たちをどのよつになさつても、不服は毛頭ありません。ですが、先にこの私の命を断つてからにお願いしたいと存じます」

常盤は、覚悟を清盛に述べ、裁定の沙汰を待つた。この様子はいかにも哀れで、人々の同情を買うことになる。

もとより清盛は、情け深い気質であった。たちまち心を動かされ、母子四人を助けることになる。その後のことば、義経の人生に影響を与えることになる。

悲劇で始まった、義経の人生の始まりを物語る幼い記憶であった。

長い時間、義経は夢という眠りの中にいた。目が覚めると、少し悲しい気分に心の中が哀愁をおびてくる。

「郷、またあの夢を見た！」

いつもの、母の常盤の夢である事は正妻の郷も知っていた。

「お勞しや、いつも悲しげな表情を浮かべて！」

「幼き頃の想い出は、心に残る物ですね」

正妻の郷が、義経を優しくなだめている様子は、どこか物悲しい。

「まだ、目が覚めていないようじゃ！」

深い眠りから目覚めたばかりで、義経はまだ寝むそうである。その凜々しいお姿も、今は寝起きの姿そのものであった。

安住の地と思えた、平泉を離れてからの熟睡した夜は、義経にとって久しぶりの事であつたのである。

朝を迎えると、太陽が燐々と地上を照らしている。

「よく眠れましたか？」

様子を覗いて来た弁慶が、義経の寝所に顔を出している。

「ご苦労である、たまには体を労わることを忘れるな！」

「弁慶がいるから、私はこうしていられるのだ」

主の側に仕え、布団にも入らないで、夜を過ごしている苦労を知

る義経は、弁慶に芳いの言葉を伝えていた。

それから、基治の屋敷で朝食を摂ると、義経主従は、この地を離れ落ちていくしかなかつた。

一行は屋敷を離れ、束稻山の頂上を田指して進んでいくことになる。佐藤基治は、長らく住んでいた屋敷を見渡すと、「さ」一人の息子に誓いを立て、この地を去つてゆく。

つづく。

## 第十一話 桜並木を進んで

春の日差しは柔らかく、薄紅色の花びらが、山の景観を美しく装つていた。佐藤基治の屋敷を離れた一行は、束稻山の登り口に差し掛かっていたのである。

束稻山は、高さ五百九十六メートルの山で、かつては多和志根山と呼ばれていた時期もあったという。この山は、あたかもたわんでいるように見える山で、その名称を経塚山・音羽山・束稻山の三つの山の総称であった。

その経塚山は、栄華を誇つた奥州藤原氏三代・藤原秀衡が経典を埋めた場所とされていた。

後に、ここを訪れた西行法師が、「さきもせず、束稻山の桜花、吉野のほかにかかるべしとは」と詠み、その華麗さに感嘆したという場所である。

一行は束稻山に咲く、見事な桜を見ながら歩いていくことになる。桜を見ながら歩いていると、亡き秀衡のことを、思いだしている義経は時の流れを痛切に感じていた。

「この場所は、あの安倍頼時が桜一万本を植えたと伝えられる桜の名所だ！」

教養のある弁慶は、桜の由来を丹念に調べていた。つねに教養のある弁慶は、学識の高さを物語る。

「さすが、弁慶よ。この場所の謂れを知るのは、そつはおらぬぞ！」

義経は、頷くように弁慶を見ている。

「ただの、無鉄砲な荒法師様とは、ちと違いますな！」

忠衡が言つと、一行はどつと笑つた。桜に名残を覚えながら、山道を進む義経の瞳には悲しさがあった。

（先祖である、義家たちが滅ぼした安倍の桜を、こうして義経が見

るのは皮肉であろうか）

そつ考えるのも無理のない義経がいる。藤原氏に、こうして世話になつてゐる、自分は何者と自問自答の心のうぢであるかのようである。

（なにかの因縁であるかのように思える。いつして、この桜を見ることになるとは、運命的なものを感じずにはいられない）

またこうして奥州の地を踏む源氏の御曹司は、導かれるように桜の咲く山道を運命的に進んで行くのであつた。

それから頂上に差し掛かると、平泉の街が一望出来た。主従らは立ち止まり、束稻山から見える平泉を遠くに望んでいた。

高館は、今でも焼け焦げて、煙をあげているのがよくわかつた。見るも無残な姿になつた屋敷跡は、影も形もない状態で哀愁が漂つてゐる。

「まだ、焦げ付いても黒煙をあげているようであるな」

弁慶は、目の前に見える景観を見つめながら呟いた。

「この景観も、見納めでありますな！」

常春が義経を見て、哀愁に染まる平泉を指差している。

遠くから望む、高館は焼け野原となり、以前のその様子は見る影もない。

「あの場所に、義経様のお屋敷があつたのですな」

「これは謀で御座います。我らは、生き延びてこそ大切な意味があるのです」

一行にとって、最後の見納めとなる為、基治が義経に話しかけてい る。義経は、基治の手をとり言葉を交わす。

「あなた様の、二人のご子息以外にも大切な行信様まで犠牲にしてしまつた」

「それでも基治殿は、この義経をお庇いになられる！」

当代一の武将と言われながら、鎌倉を追われて以来、隠れるように生き続けた義経の心境は複雑であった。来るべき頼朝との決戦を目指し、義経は生き続ける意味を見つめている。

「命をかけた、『じ兄弟のためにも再起したいと存じます！』

九郎義経は無言で、束稻山の頂上から平泉を見つめていた。見納めとなる、金色に輝く中尊寺・金色堂や毛越寺、そして泰衡のいる館は、もうこの目に見ることはないと思われる。

「さあ、参りますぞ！」

一行は、束稻山の山頂を見据えて、山伏になりすまし、先を急いで行く。

先頭は武藏坊弁慶、その後に喜三太と鷺尾三郎が続き、北の方と娘児の亀鶴姫が行く、その後に主君の義経が馬に乗って続き、その後方に主従の馬、数頭が続く。一番、後方は片岡常春と駿河次郎が控えていた。

「これも何かの因縁か、ここまで義経を苦しめるは、我が精神の不手際ゆえじや！」

自分を省みる義経に、主従は涙を浮かべながら無言で歩いていく。  
「束稻山の桜も、見納めであろう」

主従は、見てきた桜を思い浮かべる。春の木漏れ日の中、逃避行とこう運命が義経には重く压し掛かってきていた。時の流れとはいえ、再起を目指む一行は平泉の残像を刻みつつ、一心に次なる目的地へ向かっていくことになる。

つづく。

## 第十二話 観福寺にて

桜が舞っている。空は薄紅色に染まり、行く者たちを見送つてゐるようと思える。義経主従は、束稻山を超えたところで、観福寺（今の大東町猿沢地区）に差し掛かつてゐた。

ここで一行は、階段の登り口に腰を落とし、休息を取ることになる。観福寺は、真言宗知山派の寺で、開山は祐海法師といわれる。この寺の山門を潜ると、その正面には三間（約五・四メートル）の檻（けやき）造りの觀音堂が建つていて、三十段の石段が構えていた。

石段には一面に苔（ひげ）が生え、緑色に覆われている。その石段の前では、弁慶が義経の馬の手綱を引いていた。

「義経様、この石段の前にて、しばしのじ休息をとりましょう!」

馬から、下りた義経は一息つき、寺の石段に腰かけた。寺の境内には、大きな杉の木が立ち並んでいる。

「北の方と亀鶴姫は、お疲れのようであるな」  
その杉を見上げ、義経は呟いた。

京都を発つときから、連れてきている妻子を気遣つ義経がいる。郎党達は、山歩きの疲れのせいか、皆、足を押さえている有様であつた。休む事もなく、観福寺まで急ぐよに来た道のりは、一行にとつて強硬なる道のりであつた。

「大義である、この道中は難儀であるつえ、御苦労をかけること心中を痛めておる」

「どうか、充分にじ休息くだされ!」

そんな、義経の暖かい声を耳にした主従は、厚き配慮に心を打たれてゐる者が多かつた。

「もつたいないお言葉、身に染みますぞ!」

「我ら一同は、義経様を主君と仰ぐ者たちです。命をかけて、お守りするのは当たり前のこと」

主従は、義経を慕いここまで付いてきている者ばかりである。主

君の人柄に惚れて、此処まで苦難を共にしてきた一同は、義経の周りに集まり涙を流していた。

義経一行が休息していると、觀福寺の小坊主が石段を降りてくる。「どうなされましたか？　だいぶお疲れのご様子ですね」「覗いてますに、特別の事情がある模様。何処から、参られました？」小坊主は一行を見るなり、ただの修驗者ではないことを察した。一瞬、見透かされたと思った一行は、小坊主を事情を説明することになった。

「我ら一行は、山伏の身に姿をやつしたお武家の一党でござります」「かたじけない。ここを、休息の場所にしておりました」基治が、小坊主に事の事情を説明していると、小坊主は石段を駆け上がつてゆく。

「お待ちください、住職を呼んでまいります！」

小坊主は、慌てずに寺に入つていった。そして住職の顔を見るなり、ことの説明を落ち着いて始める。

「山伏なる、一行が石段の下で休息しております。どうやら、お武家さまのようであります」

小坊主は、住職に詳しい状況を告げた。

「そうか、お武家さんらしいのだな」

「彼らは、訳ありのご様子。疲れているであろう」

しばらくすると、その場に寺の住職と小坊主が現れ、義経主従を温かく迎えてくれた。

「訳ありのようだ」「さこますね、ご心配は御無用で」「さこます」「よろしければ、今夜の宿を提供いたします。狭いといでは御座いますが、どうぞお疲れを癒してください」

石段を昇り、寺の中に一行は案内された。ほんの小さな小堂ではあるが、この一夜を過ごすには十分であった。

「ありがとうございます！」

義経主従は、深々と頭を下げる。住職の暖かい言葉に、温かい人

の情けを感じ入る瞬間であった。

寺の住職は、小坊主に給仕の用意をさせている。竈かまどでは、煙が立ち込め、温かい粥が炊かれている。

それから、しばらくすると、小坊主が一行に声をかけてくる。「粥が炊きあがりました。どうぞ、こちらで頂いて下さい」

一行は、空腹を凌ぐように粥をする。住職は、心優しい人柄で一行に安心感を植え付けるような人物であった。

「ご住職様も、是非頂いて下さい」

義経は気を使い、住職に粥を勧める。

「わかりました。頂きましょう」

住職も粥をとり、一行と食事を共にする。粥は質素ではあるが、疲れている主従には有り難い食事であった。

その夜は、この観福寺に一泊して、次の日は、住職や寺の人々に深く礼をして寺を後にすることになる。この時、謝礼に亀井六郎の背負つていた、笈を置いていくことになる。

「我らは、何も持ちあわしておりません。お礼として、これなるものをお置いていきます」

そう言つと、一行は旅立つていく。観福寺の温かさと、情けに触れた義経主従は再び次なる道を田舎してゆく。

つづく。

## 第十四話 弁慶の屋敷

義経は、觀福寺で逸れた常陸坊海尊の一行を待っていた。しかし海尊らは、その場所には現れず、とうとう行方知れずになつたと思われた。

されど、僅かの可能性を信じて、次なる場所の弁慶屋敷を目指して山中を歩いていたのである。

昼間は、五十瀬神社の立つている伊勢山の森の中で息を潜めていたが、夜中になると猿沢のほとりに一軒の民家を訪ね、その主に食べるものを所望することになる。

「夜分、急にお尋ね申す。白粟五升を拝借は出来ぬであろうか？」

義経主従は、この農夫に白粟五升を求めてこの屋敷を訪れたのである。

「へい、宜しゅ「ひゞひこ」ます」

農夫は嫌がることもなく夜遅くにわざわざ、義経主従のために白粟を納屋から用意する。

「かたじけない、下級の用である訳だが、無理をさせん」

「この白粟の、借用書をただ今、用意いたすとしよつ」

弁慶は、粟の借用証をその場で書きあげた。それは、後代に云い伝えられてこの家の伝説になつたという。

「この恩は忘れぬ！ 申し訳ないが、わしの屋敷に来て、粟を焚いてはもらえぬか？」

「わかりました。弁慶さまのどうしてもの頼みです」

農夫は、弁慶の屋敷に出入りしている家人であった。弁慶は、それから外の池に向かい、足を丁寧に洗っている。

見れば、月が夜空に輝いている。その神秘的な、輝きは弁慶の心を癒すように優しく照らしていた。

しばらくすると、弁慶は屋敷内に戻つて来る。

「足を洗うのに、水を借りたぞ！」

弁慶は大きな足を、手拭いで丹念に拭きあげる。

「どうじゃ、でかい足であるつー！」

自分でかい足を、自慢するように農夫に見せつけている。

「弁慶さまは、大きな足がありますが、心はもっと大きくて優しく  
うございます」

足を吹き終えた弁慶は、白粟の包みを抱きあげ庭にでる。

「月が輝いております。今宵は明るい夜ですね！」

「まことに、輝く夜だ。白粟も調達できたのも、弁慶さまの仁徳です  
すな！」

主従は、輝く月を見ながら話していた。それから夜のうちに農夫  
を伴い、次なる田地の弁慶屋敷に義経一行は急いでいった。

月が一行を照らしていた。よつやくして義経達は、田原村の弁慶  
屋敷にたどり着くことになる。

「やつと、弁慶さまのお屋敷にたどり着きましたな」  
農夫は屋敷に着くと、土間にある竈かまどに向かってゆく。

「白粟をただ今、用意して参ります」

炊きあがつてくるうちに、匂いが屋敷の中に充満してくると、空  
腹である一行のお腹がなる始末である。

「いい匂いで御座りますな！」

空腹の義経主従は、竈の方を向いている。待ち遠しいと思える、  
竈の匂いは格別であった。

しばらくすると、白粟が炊きあがり一行の前に運ばれてくる。

「粟が、焚きあがりました。皆さんで、いただいて下さい！」

農夫は白粟粥を器に盛り、義経主従にわたしていく。空腹の一行  
にとって、この食事は格別の味であった。暖かい粥が、胃を温める  
感覚は空腹を和らげることになる。

「かたじけない、誠にこの夜分に」迷惑をおかけいたした

義経は、農夫にお礼の言葉を伝えた。

「空腹の、いい足しになりましたぞ。さすが、弁慶さまの家人で御

座います

忠衡が、農夫の手を取り気持を伝えている。一行は皆、農夫に礼をするように頭を下げている。

一行は、食事を済ませると静かに眠りについた。道中の旅で、疲れているのか、皆眠りにつくのが早く寝息をたてている。

静かな月夜の中、フクロウの声が闇夜に木靈していた。それは、静かな子守唄のように聞こえてきている。

「皆、寝入ったようじゃ。わしは、これから念佛でも唱えるとしよう」

弁慶はひとり、念佛堂に籠もり読経を繰り返している。その声は、これから先の道程の安全祈願と、逸れた海尊達の無事を祈るものであつた。

それから一日後、敷地内を歩きまわり、農夫のところまでやつて来た弁慶はやさしく話しかける。

「これより、この屋敷はお前に任せる。世話をなつたな！」

この地を離れなければならない弁慶は、屋敷を農夫に与えることを心に決めていた。

「弁慶さまは、やはりこの地を離れて、遠くへ行かれるのですね！」

これから、弁慶屋敷を管理する農夫は涙を浮かべている。一度と戻ることのない、主人の覚悟を知る農夫は複雑な心境を心に刻むことになる。

その心優しい弁慶は、農夫に満面の笑みで優しく微笑んでいた。それから、三日間滞在した一行は屋敷を後にすることになる。

「世話をなり申した。この恩は決して忘れぬ」

一行を代表して、弁慶がお礼を農夫に伝えている。

「道中、お気をつけてくださいやし」

そういう農夫は、義経一行を見守っている。一行は、春の日差しの中、屋敷を出ていった。

最後に弁慶は、農夫の肩をたたき、別れを告げて心に複雑な心境を刻んで出てゆく。

□○△

## 第十五話 多聞寺と旅の祈願

弁慶屋敷を出た義経一行は、今の奥州市江刺区にある岩谷堂の辺りを歩いていた。

その岩谷堂に多聞寺という寺がある。弁慶屋敷より、一里（現在の距離に換算すれば五キロほど）を越えたくらいの距離にこの寺は存在している。

「とりあえずは、昼に多聞寺を訪れて、夜に岩谷堂を抜ける必要がある」

内陸部から、海岸地区へ抜けるにはどうしても通らなければいけない要所なるところである。間者がいる可能性が予想されるため、夜になるまで多聞寺に滞在し、その後に、この土地を抜ける必要があつた。

「ここは、街道の主要道路です。夜になつての通行となりまじゅう一行は昼間の通行を避け、多聞寺のところまでやつてくる。

「私目が、寺の住職に頼むに参ります」

忠衡が、此処は役目なりと思い、寺に頼みに行つた。しばりくしていると、忠衡は住職を伴つて出てきた。

「これは、これは、小さなお寺ですがお休みになられてください」  
住職は、義経主従をもてなし大切に扱つてくれた。

「巡業の旅のようですね」

「春の長閑な、山寺にこうしてめぐつ合ひえたのも何かの縁です」

「のんびり、お休みください」

そう言つと、住職はお茶を入れるためにお湯を沸かしている。一行は、温かい茶を飲み、冷え切つた体を温めてくる。

お茶を啜つた一行は、夜になると岩谷堂を畠塀してゆく。住職に厚く礼をしている義経は、鈴木三郎に告げる。

「三郎の背負つている笈を、この寺において行いつゝのだが」

鈴木三郎は、背負つている笈をはずし住職の前に差し出した。

「ここの者の笠を、ここに置いて参ります。これがせめてものお礼であります」

そういうと一行は、暗い夜道をひたすら進んで行くのであった。  
暗闇を進む一行には、あやしく朧月おぼろつきが輝いて見えた。

それから、一行は夜通し歩き続け、朝日が上がる頃を迎えていた。  
幼児は背中に背負つてもらい、眠り続けている状態であった。

春の日差しの柔らかい日に、薄暗い林が寂しげに、行く手に生い茂っている。

義経一行は、多聞寺から北東に進み、玉崎神社（今の奥州市江刺区玉里字玉崎）に立ち寄ることになった。

この神社は、延暦年間（七八一～八〇六）の創建と云われ、昼でも小暗い杉並木の坂道を百メートルほど登つて行った所に、七十段の石段の上に存在していた。

「旅の修験者様ですかな、どうぞお休みくださいされ」

「登つてくるのが、大変でしたでしょ！」

心優しい神主は、おもてなしとしてお茶を用意してくれている。

「かたじけない！」

夜通し歩いた疲れを癒すように、冷たいお茶が喉を伝つていき、渴きを潤すのを感じて、心からの嬉しさを隠せない一行である。

「我らは、旅の修験者であります」

神主は、一行が訳ありの様子に気が付いていた。

「この玉崎神社は、延暦二十年（八〇一年）に征夷大將軍の坂上田村麻呂が、種山高原の大森山に逃げる蝦夷の人首丸を追う途中、この神社を訪れて武運長久を祈願したと云われております」

神主が、言い伝えを義経主従にしてくれた。

「そのような、場所でありますか」

義経は、自分の置かれた立場を感じ入り、ここで旅の安全を祈り、武運長久を祈願してもらうことになる。

神主が、祭壇を築いて祈祷を初めている。一行は、一列に整列して祈祷を受けている。

その後に義経は、この神社で経文を書き、神社に寄贈することになる。その他、持参してきた槍や太刀が神社に奉納されたといつ。それから、この神社に五日間滞在して、次なる地を田指して一行は旅立つて行くことになる。

ここで、一行は乗ってきた馬を、裏山の玉里の牧馬山に放した。今後の道は、道なき道ゆえの決断であるため、徒步で行くことが余儀なくされた覚悟の決断である。

「世話になり申した！ この恩は、決して忘れる事はありません」義経は、神主に丁重に挨拶をしている。

「道中、御無事で！」

神主は、静かに頭を下げる、義経一行を見守っていた。  
その玉崎神社の、みごとな杉を見ながら、次の旅の目的地を田指してゆく。

つづく。

## 第十六話 奥州会議

一行が玉崎神社を出る頃、平泉では泰衡が、西木戸太郎国衡を屋敷に呼び出していた。それは奥州の事態が、急展開する様相を見せはじめた事に原因があつた。

「必ず、頼朝は言いがかりをつけ、この平泉を狙つて侵攻してくるに違いない」

そう言つと、泰衡と国衡は腕を組み、目を閉じて考え込んでいる。その泰衡の館には、東北地方の地図が広げられている。

「頼朝軍が進行する際は、この場所が決戦の地といえよう」

そういうと、国衡は阿津賀志山を指差した。

現代に言い伝えられる、この場所は伊達郡国見町の厚櫻山である。この防墾は、宮城県との県境に接し、福島盆地の北端に位置する標高二八九メートルの阿津賀志山の南麓から、約四キロメートル南下して阿武隈川に近い地点までの田園地帯に所在する。

この一帯は奥州藤原氏の郎党・佐藤基治の本拠地でもあることから、南からの攻撃に対しての平泉守備の最前線基地として奥州藤原氏が重要視していた場所であつたと考えられる。

国衡は、想定した決戦の地を阿津賀志山と見込んでいる。

「この地に、かねてより防衛線を張る準備をしております」

国衡は、泰衡を見て言つた。泰衡は、その工事の一部始終を金壳吉次から聞いたことがあつた。

「その防衛線には、国衡殿が行くのはわかるが、当の基治は義経殿と共におられるではないか」

泰衡は、守りの不足をどう対処すべきか頭を抱えていた。

「藤原の軍は、源氏軍に比べれば戦の経験は皆無であることはどうにもならない」

この不利なる状況、覆すことは出来るのかは、騎馬軍団を要する奥州の勢力の闘い方にかかっている。そこに、時間稼ぎしてまでも、義経が北へ逃れる意味合いが隠されていた。

そして鎌倉方が攻め入る前に、奥州勢の戦闘訓練の実施が必要不可欠であることは言うまでもない。

「今から、奥羽地方の豪族を含め、近従者に書状をしたためるか！」

泰衡は、近くある決戦に挑むため、奥州会議を近隣に招集することにした。平泉からは、急ぎの早馬が、次々と近隣に向かって出発してゆく。

それから数日して、奥州藤原氏の泰衡館に、西木戸太郎国衡、陸奥国桃生郡の高衡、前民部少輔の藤原基成があらわれ。

藤原氏一門衆の樋爪俊衡の息の太田師衡、同じく河北忠衡、藤原季衡の息の新田經衡がやつてくる。

譜代家老衆のなかでは、信夫庄（福島県信夫地方）の大島城を治める佐藤基治のその息の佐藤正信、佐藤信重がやや遅れてくる。

泰衡の郎党では胆沢実政、由利八郎、国衡の郎党の金剛秀綱の三名があつまり、そして、出羽比内郡の領主の河田次郎、出羽の八郎潟東部の豪族の大河兼任、出羽田川郡の領主の田川行文、出羽秋田郡の領主の秋田致文が集合してきた。

一同が、屋敷に集まると泰衡が口を開くことになる。

「さすれば、鎌倉の頼朝の侵攻は確実のものとなつた。只今より、防衛を致す為に緊急評議を開く所存である」

泰衡の落ち着いた、態度には皆が驚かされていた。実際のところ、実戦経験がほとんどない奥州勢には、勝機が見いだせないのが現実であることに皆はどうするか不安に感じていたのである。

「義経殿なら実戦経験は豊富なのに、何故に逃がしになられる」この状況下で、実戦経験の豊富な義経が、いないことは痛手のように思われるるのは仕方がない。

「彼には、生き延びて貰いたいという一心で、この平泉より、お逃

し申したまで」

泰衡は、義経を巻き込みたくないと考えてのことであった。大きな芝居を演出して偽の首を献上した。その想いは泰衡の人としての器量を物語る。

「鎌倉軍は、この奥羽の地に大軍で攻め込んでくるであろう」

「その数、およそ二十五万は下るまい！」

「もしかすれば、この数より多い可能性があると思われる！」

国衡は、敵の数を予想して地図を開いた。伊達郡国見町の阿津賀あつか志山しづかの防衛諸点の状況が説明されている。

「この場所には、防衛地点として、以前より防壁をこしらえてある大軍を、いかに防ぐかが問題となる！」

「今の、状況では急いでの軍事訓練も出来る状況ではない」

「固い柵を構え、敵を足止めする策で御座ります」

国衡は、説明を終えると腕を組んで座り込む。奥州軍は、抵抗がどこまで出来るかが、この戦の勝負といえた。

「源氏は、精銳揃い！」

「時間稼ぎが、精一杯の抵抗でありますか？」

望みのない、闘いに気持が消沈している武将も出てくる。それが、平泉の今の現実と思えた。

逃避行を続ける義経の、存在が今後の鍵を握ることになる。

つづく。

## 第十七話 義経屋敷

さて一行は、東南方の伊手に向かうことになる。馬を捨てたのも険しい道のりであり、道なき山に分け入るためであった。

草木を分け、木々につかりながら歩いて超えるのは、女子供には難儀の場所であるばかりか、危険が伴つ場所でもあることが予想された。

「歩くのは、辛うじてります」

義経の四歳になる亀鶴姫は、泣きじゃくりながら歩く始末であった。途中、北の方と幼き姫君が念をあげそうになるが、主従が支えて越えるに到つた。

伊手は、藤原一族の領地でもあつたので、以前の来訪の際、義経に好意的な人々である。

「しかし、道なき山を越えるのは、至難な業でござりますな」  
義経を支える、弁慶が呟いた。伊手の村には、義経の屋敷がある。それを目指して、一行は山越えをしていた。

「頑張れ！ ここを越えれば屋敷にて休めるぞ！」

義経は、一行に声をかけている。

「常春、私は歩くのが限界で御座います」

亀鶴姫は泣きじゃくり、疲れ果てて、片岡常春の背に背負つてもらひ。

やつとの思いで、一行は義経の屋敷に到着する。義経の屋敷は、杉の古木に囲まれていた。

現在の義経屋敷は、いつの頃よりか、「源休館」と呼ばれ、巨大な岩の祠があり稻荷神社が祀られている。

その場所は外から、見えないようになつていて、しばしの休息には役立つ場所のように思えた。

「中に入つて、休もうではないか！」

屋敷にたどり着いた一行は、荷物を降ろして銘々が座り込む。

「馬に乗る時は楽であったが、いざ、徒步でこれから道中は女子供ではきつからうに！」

義経が心配して、北の方を覗つた。

「大丈夫でござります、覚悟の上です！」

か弱き女子の北の方も、ひとりの母親となり自覚が見えている。京都を出る頃より、運命は共にした義経の妻は強さが備わっていた。「父の仇を、義経様が討つまでは、私は側で支える役目があります」父の河越重頼は、義経の縁戚である事を理由に、所領である伊勢国香取五力郷を没収されて、その後、重頼は嫡男重房と共に誅殺されていたのである。

義経の表情は、悲しみで充ちていた。思えば、黄瀬川の対面の時に兄を慕い駆けつけ、その後は一御家人として平家を討ち、兄との確執として牌<sup>ひび</sup>が入り、ここまで落ち伸びてきているのが現実である。「すまぬ郷<sup>さと</sup>、わしのために不自由をさせる」

義経は、北の方を抱きしめる。その義経を見ている一行に、涙しないものはいなかつた。

人生は、そう甘くはない。苦難を経験した、義経一行は生きる強さを日増しに身につけてきている。武将としての魅力が、義経の人生の全てであり、生き様は従える人物を魅了<sup>了</sup>している。

「常陸坊は、ここに来た形跡はないのか？」

義経はひとこと、屋敷内にいる家人に海尊の所在を確かめた。

「お見えには、なられておりません。常陸坊様は、以前、消息が解からないのでありますか？」

家人は、留守居の役目の中、何もなかつた事実を告げる。

「来ていないと、いうのは、遅れていることも考えられるのではない

か？」

常陸坊は忠臣である。裏切ることは、義経も一行も考へることはできない。それから一行は、この伊手の地で常陸坊を待つために、数日を過ごすことになる。

義経の屋敷の、見回りを担当している常春と弁慶が会話をしている。その話は、以前の逃避行の思い出話である。

「殿は、常陸坊様を信じておられる。その思いには、私にはよく分かるのじゃー。」

弁慶は、目を閉じた。以前、散り散りになつた時も、義経様は配下を心配していた事実は変わらない。

「そだのう、の方には不思議な優しさがある。それに意味を知つた我らは、本当の姿を見ているのだ」

常春は、従つてから命をかけてまでもお守りしようとした誓っていた。

それから数日が過ぎても、常陸坊は現れることはなかつた。

「どうしているのか?」

ぱつりと、常陸坊を心配している義経が、溜め息を漏らす。  
この場所で、会えるとふんでいた一行は、肩すかしを食らつた心境にかられている。

「常陸坊が現れたら、我らの向かう場所を教えてくれ

そう言い残すと、一行は、義経の屋敷を出て、再び奥深い山中に入つて行く。

つづく。

## 第十八話 人首という土地

桜の木は花が落ち、葉桜の様相を醸し出している。山野は緑を増し、一行の進む奥羽の地は、初夏の季節を迎えていた。

義経主従は、銚子山を越え、右手に遠く阿茶山の峰を眺めつつ、ひとかべ人首に向かっていた。

人首という地名は、坂上田村麻呂おおたけまるが栗原郡で大猛丸を盜伐した際、その子の人首丸がこの地に逃亡して隠れたことからきている。

「この人首が、海岸へ出るには、どうしても通るべき道であるといえましょう」

田村麻呂の蝦夷征伐は、八世紀から九世紀であるから、このあたりから人家があつたと思われる。

「古の時代から、このよつな隠れ里みたいな場所に民家があるとは「義経、驚きの心響は隠せない！」

人首は、小さな部落でありながら、民家が点々としていた。

「今日は、何処かの民家に頼んで、一夜を求めることにいたしましたよう」

忠衡を中心に主従の数名が、人首にある何軒かの屋敷に宿泊の許可を求めに行く。

「申し訳！」ざらんが、一夜だけ宿を求めるわけには参らぬか？」

「それは、無理な申込みです。素性も知らない輩に、止める場所は

「ござりぬ！」

忠衡の最初に行つた屋敷では、残念ながら不信に思われ断られた。

「無理を申した」

それから何軒か探しているうち、やつとのことで宿泊の許可を頂くことになる。

「宜しゅうございます。狭い場所では御座いますが、どうぞお入りください」

山沿いの一軒で休息を求めた一行は、有り難くも一泊を許可され

ることになる。

「かたじけない！ 素性も解からぬ我らを、屋敷にお泊め下さり有り難く思います」

一行は、囲炉裏のまわりに腰かけると、屋敷の主人である農夫に厚く礼を述べ始めた。

「いやあ、とんでもねえ。お困りの様子でしたので、せめてものご休息にと考えたのですじゃ！」

快く承知した上に、囲炉裏まで灯を燈し、暖を取らせてもらつた一行は、しばしの休息をくつろいでいる。

そして民家の主に、僅かの給仕をいただき、一行は人首にて一夜を過ごすことになる。

やがて月は大地に隠れ、山の裾からはひかりが射し込み、そして静かな朝を迎えることになる。

「今日はこれより、なおもきつい峠越えです。勾配があり難所でございますが、頑張りましょう」

弁慶が、疲れている一行を励ましている。人里離れた、人首は金山地帯でもあつたゆえ、人々の横行がある。

「僅かばかりですが、おむすびをと思い、それがしの女房が握りました」

「山中にでも、広げて食べて下さい！」

屋敷の主は、にぎり飯を与えてくれた。

「これにて、ご免。大層お世話になつて申し訳なかつた！」

早朝、民家を離れた一行は、人の目を、搔い潜るように山道を越えねばならないのが現実であつた。

目の前には、五輪峠が聳えている。その行く手を遮るかのよつて山並みが奥深く続いていたのである。

「遠回りして、種山ヶ原を迂回せねばなるまい

「野宿も、覚悟せねばなるまい！」

義経屋敷から、僅かの食事分を調達してきている。しかし、これ

より先は天然の素材や獣までも食す必要があると考えられた。

なおさらの、山道である。今までとは行かぬ危険もはらんでいる

ことが予想される。

これよりは、原生林が生い茂る狐狸の道と覚悟を決める一行がいる。

「今後は、女子供には苦難の道のりである。付いてくるにも、大変であろうつー。」

心配する義経に、北の方は辛いながらも歩き続いている。亀鶴姫は、片岡常春らにおぶさり山道を越えることになった。

「「めんね、常春！ 世話をかけてばかりじゃ」

幼いながらも、常春を気遣う姫さまは優しき心を持つている。

「左様なことは、覚悟の上でござりますよ」

常春が、優しく姫を背におぶりながら歩いていた。これから、差し掛かる山並みが一行の目の前には壁のように立ち塞がり、いかにも邪魔するかのよう見えている。

つづく。

## 第十九話 遠野をながれる川にて

人首を抜けた一行は、現在の遠野市の小友より、鱒沢に抜け山伝いに綾織の続石を訪れていた。

義経一行は、この続石で雨の休息を済まし、遠野を超えて釜石に抜けることを考えていたが、人の往来が多いこと、そして関所の監視が厳しいことが遠回りを決意させる。

そして今回は、近道の一郷山（現在の綾織地区にある山）の小友峠を越え、小友に向かうことが決められる。

それから続石を離れた一行は、遠野を流れる河川の、猿ヶ石川を越えねばならぬ事に難儀していた。

「この川を越えれば、小友という里に向かえる筈である！」

この猿ヶ石川を、超えて小友の村に抜ける手立てを考えている最中である忠衡が呟くようにいった。

夜になつて、歩きだした一行は雨も重なり徒步での渡河が不可能と思える事態に困り果てている。

「雨が、祟つたな！ 船着き場を探す必要がありますな」

片岡常春が、流れを覗いながら下流歩いて行く。道は月明かりが頼りであるが故、あまり離れることが出来ない。

「下流に向かつた、常春に追いつけ！」

義経の命により、足の速い下僕の男が走つて行つた。男は、懸命に常春を追つた。月明かりを頼りにして、ひたすら走り続けた。

息が切れ、呼吸が乱れたが必死で追つていいく。やがて、常春を月明かりに見つけると叫ぼうとした。

その瞬間、こちらに近づく気配を感じる。

「誰だ！」

下僕の男は、心でそう思った。片岡常春も、気がついたのか身を屈めている。

一瞬の静けさが、月明かりの中で緊張感を醸し出す。下僕の男は常

春と目を合わせ、確認を取り合つ。それから、二人は合流して、男の行動を見ていた。

「川の様子を、見に行つているように見えるが」

常春が、すかさず支持を与えた。

「あの男に近付き、様子を探つて参れ！」

下僕の男は、今来た別の男に暗がりの中を近付いていく。月夜のなか、辺りは静けさを増している、男が近付いて行つたのは渡しの小舟であった。

常春の指示を受けた、下僕の男は渡し場の男に話しかける。

「この夜分、何の用じや！」

渡し場の男は、不信そうに下僕の男を見て言つた。それから下僕の男は、渡し場の男と交渉を始めた。そして常春を呼び寄せる。

「どうやら、この川を渡してくれるようですね」

常春は、その言葉を確認すると、下僕の男を義経のもとに走らせる。そして、渡し場の男に深々と礼をするのであった。

「お困りの様子、この場を渡してさしあげましょう」

そういうと、渡し場の男は船を出す準備を始めていた。

次第に、闇は月を覆い、義経らの密かな行動を、陰ながら支えているように思われた。しかも、人の気配は渡し場の男と、義経の一行以外は感じられない。

「静かな、闇夜だ！　まさに渡河するには、絶好の機会を得ている」側近の常春が、月に群がる雲を見つめている。渡し場に向かう、義経の一行は、船着き場に到着し、渡し場の男に会釈している。

「責任もつて、この河をお渡しいたします」

船着き場には、小さな小舟が数隻ではあるが、岸に縄で括りつけてあつて着岸していた。

「夜分、ご迷惑をおかけする。誠に、忝かたじけなく思つところである」

義経は、男の手をとり、心からの感謝の言葉を述べている。男は、義経の気概のある態度に感心していた。

「ここは、私の出番ですね！」

その男は、駿河次郎であった。

「お主がいれば、心強い！ 海賊まがいも、役に立つわい」  
弁慶が、高らかに笑っていた。

「海賊呼ばわりは、酷いではないか！」

むきになる駿河次郎が、何処か、おかしく感じた一行は船に別れて乗り込み、猿ヶ石川を越えようとしている。

「弁慶が乗り込むと、船が沈みそうになるぞー！」

船を漕いでいる、駿河次郎は笑っていた。

雨で、増水している河は流れが速い。それに負けぬ様に、漕ぎ続ける漕ぎ手は容易ではなかつた。

「渡し場に向かうには、上流に漕いで行くしかありません」  
渡し場の男が、漕ぎ手になつてゐる義経の主従に声をかけている。  
一行はようやく、対岸にたどり着き、田町の峠を田指すことが出来るようになった。

「誠に、かたじけない。世話をかけ申した！」

義経の一行は、船着き場の男に丁重に挨拶を済ませると、道を急ぐように山道を田指して、義経一行は小友に抜けることとなる。

つづく。

## 第一十話 験しき姥石峠

一行は再び小友の地を訪れる。夜半に差しかかった小友の小さな神社で、一泊の休息を取ると一行は再び歩きはじめた。

そして南下を開始し、姥石峠の手前まで差し掛かる。ここからは、段々と勾配がきつくなる故、疲れもひとしおであると思われた。遠くに木靈する、獣の鳴き声が一層のこと、一行の恐怖心をあり立てるよう邪魔するように思われた。

「あの鳴き声は、何でござりますか？」

不安がる、北の方が鷺尾三郎に聞いた。

「あれは野犬か、狼と思われます。大丈夫です、私が付いております故！」

鶴越の際、獣道を義経主従に案内した鷺尾三郎は、慌てることもなく北の方に説明を加え、安心感を与えていた。

「殿、今宵は恐らく、野宿の可能性があります。日が暮れるまで、安全な場所を求める必要がござりますぞ！」

山道を知る、鷺尾が義経主従に話していた。

「仕方あるまい、より安全な場所を求める必要があるな」

人首を出た頃は、朝の五時過ぎであったが、今は太陽が昇り、暑さも身に染みる。五輪峠に差し掛かつた時は朝の九時過ぎであった。この頃は、時計などない。瑜一、太陽の動きが時間を確認できる手段であった。

「太陽が、出ているうちは時間が分かります。それを頼りに時間を確認するのですよ」

姫に、時間の知る方法を、鷺尾三郎が伝えている。

「太陽の動きを、見ていると動いているのが分かります」

背におぶられた姫君は、太陽を見ながら考えている様子であった。険しい山道は、一行の行く手を遮るように続いている。

「殿、吉次殿に会われたら、馬を調達すべきでしょう」

山を越えたあとは、急激な山道は少ない。弁慶は、主の義経に話しかけている。

「弁慶、吉次殿の所へはどれくらい掛かるのじゃ」

「今は、この峠を越えるのが先決です。その後に考えても、遅くはありません」

一行は、峰伝いに物見山を越えた頃は正午を回っていた。

「これより、姥石峠に差し掛かります」

案内人の、忠衡の家人が一行を案内している。この辺りで、昼食を食べることに決め。一行は、握り飯を食べ始めた。

「喜三太、米粒が顔に付いてるぞ!」

義経が、それを見ながら笑った。喜三太は、米粒を取ると口に入れた。一行が、笑ったのは久しぶりであった。

「わしは、手に付いている!」

大きな手をかざす、弁慶の様子を見ていた北の方が子供と一人で微笑んでいた。

義経主従の、久しぶりの笑い声が、山に木霊している。

それから姥石峠の中腹で食事を済ませた一行は、この地域の伝承を道案内人から聞くことになる。

北上山脈の、峰続きを読むと超えて来た義経主従は、その話に釘づけになつた。その話の内容は次のとおりである。

「この峠の中腹にある「姥石」は、その昔の事、女人禁制を侵して、この山に登つた若い巫女が、神の怒りに触れ、一瞬にして石に変えられてしまつた伝承があります」

道案内の男は、知つてゐる知識を丹念に説明していた。その説明を聞き終えると、一行は道を進んでゆく。

その姥石峠は、現在の種山ヶ原（岩手県奥州市江刺区と氣仙郡住田町の境）の肩の部分にあり、この辺りは隠れ里の雰囲気が感じられる。その昔は、金山が点在していたといわれる土地柄であったようだ。

峠も、中腹まで差し掛かつたあたりであろうか、辺りの風の流れを感じていた鷲尾三郎が獸の匂いを嗅ぎ分けていた。

「しつ、お静かに！」

獸の氣配が、することに遠くで気がつくとは、鷲尾の感であらうか、実戦になると役に立つ嗅覚は天下逸品である。

「獸が、こちらに近づいてまいります」

山に慣れている、鷲尾三郎はこいつにいつ場合に、とても頼りになる臣下の男であった

「まことか？」

駿河次郎が、鷲尾の顔を覗いている。

「久しぶりの実戦か！」

一同は身構えている、近寄る危険に一行は騒然となる。刀を抜き、身構える鷲尾の顔は真剣であった。

「来たぞ！」

笛やぶが揺れ、狼らしき唸り声がこちらを覗いていた。その氣配は、僅かの群れではない。

それから、狼らしき群れは、一行を襲うことになる。刀を抜き、向かってくる獸を切り伏せる男たちがそこにはあった。

北の方と幼児は、義経と弁慶らに護られている。一時は騒然となつたが、落ち着きを取り戻す頃には、夕暮れが近づいてくる。

「こ奴等は狼のようだが、この辺りには狼がいるのか？」

山道の危険を、実感した義経主従は、気を緩めることはできない状況であることを知る。

「やはり、野生の獸は恐ろしいものですね」

北の方が子供を抱きしめ、義経の側に寄り添つていた。

太陽は西に傾き、日暮れが近づいていることを、一行に一層なる不安感を植え付けている。これからも、ありうる自然の恐怖を味わつた義経主従が奥羽の奥地を進んで行く。

つづく。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9840p/>

義経生存伝説～夢のかなたに～

2011年10月10日03時11分発行